

NPO 団体 EM e.V. 出版「EM ジャーナル」より抜粋

EM ハイチにて

～地震の前と後～

EM は 2004 年にパオライテン氏（NGO 団体所属）よりハイチにもたらされた。それ以後の経験をもとにして、今回の地震においてもポートプリンスで災害援助の助けをすることができた。



排泄物に EM 活性液が散布され、悪臭、病原菌の対策がされる。

《パオライテン氏の話より》

2010 年 4 月 18 日 ポートプリンスで 7 年前に私はすでに 30 年以來会っていなかった友人を通じて EM を知るようになりました。

私はまず、2004 年にスイスから EM・1®を手に入れ、それから作った EM 活性液をハイチに持ち込みました。その後、EM・1®とセラミックス製品を現地に持ち込み、スイスの NPO である IGEM のメンバーになり、セミナーや視察などを頻繁に行うようになりました。

2006 年、ドイツで行われた「EM フェスタ」では、EM に携わる様々な国の方々と知り合うことができました。特に、その時出会ったコスタリカの方との EM 関係者とは、その後もコンタクトをもち、アース大学を 2 度訪問しました。

1970 年代からハイチに移住、2004 年から EM を使用

ハイチは、貧しく、自然災害にも度々襲われている国ではありますが、2010 年におこった地震は特別なものでした。

私自身、EM 活性液、EM・X®その他 EM 製品、セラミックスパウダーなどがなかったら、これらの震災に何ができたかわかりません。

2010 年 2 月からドミニカ共和国において EM・1®を購入できるようになりました。というのもドミニカ共和国では 1 年前から EM・1®が製造されるようになったためです。

それまではコスタリカとハイチの間に直接の経済交流がなかったため、非常に高い価格でアメリカから買わざるを得ませんでした。2007 年にはハイチにおける EM 活動について EM ジャーナルが報告をしています。

GONAIVES（首都ポートプリンスから 150km 北へ行った都市）から 12km 離れたベーシングマグナムにある環境センターで青少年を対象としたセミナーをスタートしました。

そこでは環境保全のための、ごみの分別、植樹にする苗木、さらに堆肥やボカシ作りが行われています。また同センターでは、その他いくつかのプログラムが実行されています。

ハイチでは、新しいものに興味を呼び起こさせるのがとても難しい国民性の為、当初、EM の普及はあまり進みませんでした。

2006 年の半ばに、このセンターに二人の EM を扱う研修生が入ってきました。その研修生を中心にハーブの栽培や植樹をするための苗の育成、また野菜の育成に EM を生かすことができるようになりました。彼らはその後あらゆるセミナーに参加し、今では自分たちでセミナーを開くことができるようになっていきます。特にその中心テーマは EM 活性液、EM ボカシの作り方、またその野菜、土壌への施用方法となっています。

この EM 研修は現地の言葉で行われ、多くの資料などが現地語に翻訳されています。また現地には小さいながらも EM ショップが作られ、運営されています。15 年前に私が共同で設立したグループが 2008 年に資金援助を受けられるようになったため、このグループに参加している女性グループに対しヤギや馬、ロバなどの EM を使った飼育方法も教えられるようになっていきます。動物たちの自然治療も EM を加える事によって改善されるようになりました。たとえば、けがをした際には、EM 活性液で洗い、アロエベラ、セラミックスパウダーを混合したものを処方することでケガの治りが早くなりました。

このように荷物を運ぶ動物たちだけでなく、豚やウサギ、鳥などにも同様の処方が適用されるようになりました。実は鳥たちにとって、この地域で生きるのは大変厳しいのですが、EM 活性液を水に混ぜる等で乗り越えられるようになっていくように感じます。

自然災害

・2004 年 9 月 11 日、にハリケーン「ジェーン」がこの地域に大きな被害をだしました。同時に発生した洪水により 3000 人以上の命が失われました。その被害にあたり、悪臭等が問題になっていたのですが、EM によりその悪臭を消すことができました。

・4 年後の 2008 年 9 月、4 つのハリケーンがこの町を襲いました。そのうちの最も大きなハリケーンで 1000 人の死者が出ました。次第に知られるようになっていた EM が、この時も病院、診療所、学校等で使われるようになり、警察署や刑務所等でも悪臭を抑えるために EM が活用されました。

・2010 年 1 月 11 日の大地震が到来しました。この災害の報道は世界中を駆け巡りましたが、私自身、コートプリンスで何とか被災を免れ、被災者の手助けで EM を使って行うことが最善であると認識しました。

2010 年 1 月 11 日のハイチ大地震の体験日誌

> 第 1 日目

何とか、車を調達し、EM・1 や糖蜜を取りに行き、EM 活性液を製造することが次の課題となりました。私はこの EM 活性液を小さなボトルに詰めかえ、遺体を埋葬場所に運ぶ人たちに渡し、活用されました。

> 1 週間後

各所にテントやゴミ箱、簡易トイレ等が設置されるようになってきました。国際赤十字の人から、仮設トイレがひどいにおいであることを聞き、EM 活性液を散布するようになりましたが、このような仮設トイレは 400 か所以上にのぼり、とても全部には行き渡りませんでした。

また、環境省とも共同で EM 活性液を悪臭を放つ遺体等に散布されました。保健省では、伝染病の予防のために EM 活性液が使用されました。

もちろん各家庭でも EM 活性液が使用されました。

➤3 ヶ月後

数千リットルの EM 活性液が散布されましたが、EM を如何に多くの人たちに配布できるようにするかが課題となっています。

幸運なことに製糖工場が稼働し始めたため、EM 活性液だけでなく、特に子供たちの栄養失調に対して砂糖の供給などの提供ができるようになりました。

WHO の推奨する簡易飲み水製造機と EM の併用も積極的に進めていきたいと思っています。

最後に、非常に厳しい状態にあるハイチの人たちに送られた EM 関係者の温かいさしに感謝したいと思います。



2008 年にごみ処理場で EM 活性液が散布された



仮設トイレへの EM 活性液の散布



散乱するごみなどは熱帯の気温にさらされ、悪臭を発する。EM の重要な使用場所となっている。



多くの場所に仮設テントが設置されましたが、環境が悪く、EM が使用されています。



多くの建物が破壊された



政府官邸の様子



環境センターでEMによって栽培された植物



環境センターで環境教育を行う